第6章　あぶり出し編

1945年に日本がポツダム宣言の受諾を迫られた際、鈴木貫太郎内閣の声明は「**閣議ニ諮ルマデ黙殺スル**」という文言であった。この「**黙殺スル**」の部分を**ignore**と訳したことが原爆を落とされる遠因になったという説がある。ignoreは「これ見よがしに無視する」という強い拒絶を表す語である。私見では、この翻訳の問題点がなかったとしてもアメリカの原爆投下の意向は変わらなかったと思うが、ここでは語学として、この問題を考えてみることにする。

「黙殺する」とは「無視する」ということであり、ignoreという直訳は決して誤訳とは言えない。翻訳家の中村保男氏は『名訳と誤訳』(講談社現代新書)の中で、この問題はこの声明の**日本文が非論理的**だということを指摘なさっている。「閣議ニ諮ルマデ」と期限を設けるのであれば「**黙殺スル**」のではなく「**保留スル**」と言わなければならない。この問題点は単語レベルよりも**文全体の整合性**にあったのだ。

日本語は英語と比べて論理性に書いた言語であることが指摘されるが、その一因として、日本語における省略ということがあげられると思われる。いちばんの例は日本語では主語が明示されないことが多いことである。これ以外にも、「男は度胸、女は愛嬌」「春はあけぼの」といったような言い回しもある。こうした表現を英訳する際には、英文では述語まで補わなければならない。いわば、**あぶり出し**をしなければならないのである。いま一つの要因は、日本語では多少論理が飛んでもなんとなくわかった気になるというところがあることだ。これを**論理の飛躍**と呼ぶ。こちらの英訳の際にも、論理を飛ばすことなく途中のつなぎの部分まで補って処理するのが正しい姿勢である。

この章では、京大の問題の中かから、**省略や論理の飛躍のある日本文を取り上げ、英訳する際にどのようにして補っていくか、あぶり出しをしていくか**を考察する。